

母語話者規範からの逸脱に対する留意、評価と調整行動

—日本語学習者の音声的特徴を視点に—

高村めぐみ (立教大学)

Note, evaluation and adjustment by deviation from language norms: Focus on phonetic problems of Japanese learners

Megumi TAKAMURA (Rikkyo University)

キーワード： 接触場面, 調整行動, 母語話者評価, 音声的な問題

Keywords : contact situation, adjustment, note, native speaker's evaluation, phonetic problems

SUMMARY

The purpose of this study was to examine how native speakers and learners of Japanese choose adjustment and what kind of phonetic problems were considered as deviations from language norms by native speakers. The results indicated that native speakers will use “clarification questions” while Japanese learners will use “positional reprise” to adjust the situation, and only the deviation of pause was negatively evaluated by Japanese.

1. はじめに

外国人学習者 (NNS) の日本語の発音に対する日本語母語話者 (NS) の評価について、小河原 (1993) は「発音が下手なうちは許容されるなまりも、学習が進み発音がうまくなるにつれて評価が厳しくなる」と述べている。反対に、「理解できれば良い」「コミュニケーションに支障がなければ問題ない」という意見もある。一方、NNS 自身の発音については、「様々な場面、学習段階において不安を感じている」(小河原, 1999) という調査結果がある。NS と NNS の発音が様々な点で異なるが、相違点が、即、留意される点であるとは限らない。さらに言えば、規範からの逸脱を NS に留意されたとしても、マイナスに評価されない点であれば、必ずしも指導が必要であるとは言えないという意見もあるだろう。つまり、日本語教育の現場において優先順位が高いのは、日本語母語話者が留意し、かつ、それがマイナスに評価される点を指導することであると言えよう。

日本語母語話者が留意し、マイナスに評価するものの一つに「NNS の発音のせいで理解ができない」ことがあげられる。それでは、NS は、NNS と話をしていて「理解できない」と判断したとき、どのような行動をとるのだろうか。反対に、NNS は NS

に「理解されていない」と判断したとき、どのような行動をとるのだろうか。

本稿では、ネウストプニー (1995a, b) の「言語管理プロセス」を用いて、音声に関する留意点を分類した。言語管理プロセスの最も簡単な形は 1.逸脱がある、2.それが留意される、3.留意された逸脱が評価される、4.評価された逸脱（問題）の調整のための手続きが選ばれる、5.その手続きが実施される、という構造であると述べられている。本稿ではファン (1998) を参考に以下の構造で分析を行った。

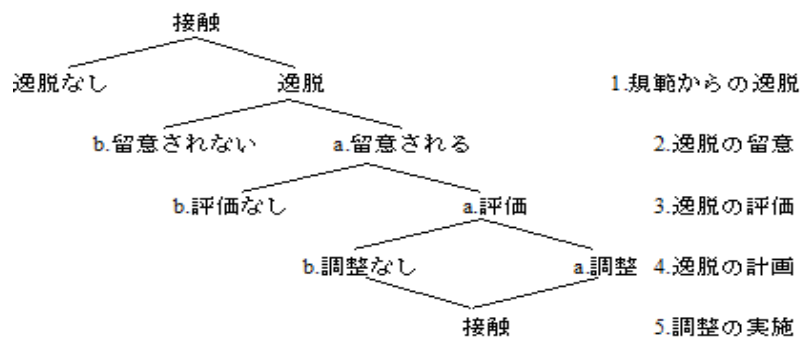


図1 言語管理プロセス

2. 先行研究

NS が NNS の発音面で留意する点について調査した研究では、小熊 (2002) が 79 名の NNS にインタビューをし、それを資料に日本語教師 8 名が留意した点を 1.拍の増加、2.拍の減少、3.拍の交替に分類したものがあ。また、河野 (2004) が東京話者である大学生 24 名を協力者に、韓国人学習者の読んだ様々なアクセントパタンのイ形容詞について聴取実験を行った結果、日本語母語話者の間でもアクセントに「ゆれ」があるものについては許容度が高くなると述べたものがある。

接触場面で問題が発生した時、その解決に向けて様々なコミュニケーションストラテジーが使われるが、「相手の話が聞きとれない、分からないという問題に直面し、それを解消するために相手に働きかける方略」(尾崎, 1992) として「聞き返しストラテジー」が、また「描写したい事物の語彙を知らない、或いは既習だが不確かである時、発話を中断させないよう他に知っている語や関連語彙を使って言い換える方略」(和泉他, 2005) として「言い換えストラテジー」が使われる。

宮崎 (2002) では、参加者のうち誰が問題をマークし、調整行動をとるかにより、①聞き手 (他者) が不適切さをマークし、話し手自身 (自己) が調整をデザインする「他者マーク自己調整」、②話し手自身が不適切さをマークし、調整のデザインを行う「自己マーク自己調整」、さらに、③話し手が不適切さをマークし、聞き手に調整を要求する「自己マーク他者調整」、④話し手が調整行動に全く参加しない「他者マーク他者調整」の 4 つに分類している。さらに、1 回だけの調整交渉で取り除かれない場合もあることから、調整の回数 (調整フレーム) に注目し、1 回だけの調整に基づく発話交換を「単純調整」、連続した調整行動の連鎖を「複合調整」と呼んでいる。

本研究では、宮崎（2002）を援用し、調整行動を4分類した。さらに、日本語が使用された接触場面において、NSがNNSの発音を母語規範からの逸脱として「理解できない」という否定的な評価をした場合、どのような調整行動に出るのか、また、「理解されていない」と判断したNNSは、どのような調整行動に出るのか調査した。さらに、NSが「留意した発音」、「留意したが否定的に評価しなかった発音」「理解はできるが否定的に評価した発音」には、それぞれどのような逸脱があるかを調査した。

3. 調査方法

本研究では、2組の接触場面を扱った。中国人学習者1名（C）が、日本語母語話者2名（JN, JH）とそれぞれ1対1で約10分間自由に会話をした場面である。CとJNは初対面で、CとJHはお互い顔を知ってはいるが、言葉を交わすのは今回の調査が初めてである。調査協力者のプロフィールを表1に示す。会話の収録の際、なるべく自然な会話が収録されるよう、基本的には自由会話とし、参加者に話題の選択を任せた。但し、会話が途切れて困った場合を想定し、困った時には使うようにという但し書きを添えて、あらかじめ「学校生活で楽しいこと」「日本に来て一番印象に残っているエピソード」等の身近な話題を提供しておいた。だが、実際には、2組とも会話は途切れることなく進んでいった。

表1 調査協力者のプロフィール

No.	調査協力者	性別	母語	年齢	日本語レベル
1	C	男	中国（広東）	20代前半	中級
2	JN	男	日本語（東京）	30代前半	—
3	JH	男	日本語（北海道）	30代後半	—

次に、録音した音声の文字化を行った。さらに、会話を録音した1～2日後、会話時の参加者の内省を明らかにするために、調査協力者3名にそれぞれインタビューを行った。筆者と一緒に会話を録音したテープを聞き、調査協力者が留意した箇所でテープを止め、音声のどの点にどのような留意があったかをインタビューした。具体的には、「Cさん／あなたの発音で、気になることがあったらテープを止めてください。そして、どの点がどのように気になったのかコメントをしてください。また、それは会話の最中にも気になっていたことだったか、あるいは録音を聞き直して初めて気になったことなのかを教えてください。」と言った。

以上の手順で、JN, JHが「発音が原因で理解できない」、Cが「発音が原因で理解されていない」と評価した場面を選定した。同様にJN, JHが「理解は出来るが否定的に評価」、あるいは「発音の逸脱に留意」した場面を選定した。

3.1 母語話者規範からの逸脱と調整行動

JN, JHは、Cの発音が規範から逸脱していることによって「理解できない」と留意

し、それに対して否定的評価をし、調整行動に出た。その際、コミュニケーションストラテジーを用いて調整を試みているのだが、本稿では、その中で JN, JH が用いた「聞き返しストラテジー」を、①繰り返す、②予測して質問する、③直接的に質問する、の3つに分類した。これに、④聞き流す、を加えた4つを対象に分析を行った。同様に、JN, JH の調整行動を受けて、C は自分の発話が理解されていないと留意し、それに対して否定的な評価をし、調整行動を行っているのだが、本稿では、その際に用いられたストラテジーを「言い直しストラテジー」と名付け、①語彙を言い換える、②発音をし直す、③例をあげて語彙を説明する、の3つに分類した（表2参照）。

表2 発音逸脱による調整行動で見られるストラテジー

NS : [聞き返しストラテジー]	①繰り返す	②予測して質問する
	③直接的に質問する	④聞き流す
NNS : <言い直しストラテジー>	①語彙を言い換える	②発音をしなおす
	③例をあげて語彙を説明	

3.2 調整行動の例

以下、宮崎（2002）に従い、1.参加者のうち誰がその問題をマークし調整行動をとったか、2.調整の回数は「単純調整」か「複合調整」かにより分類した。順に例を示していく。グレーで示した語彙は発音に逸脱があると考えられる発話を示す。下線は、調整行動を促す引き金（Trigger）となった調整マーカを示す。

【例1】自己マーク他者調整・単純

- 15C : 去年のじゅが、じゅうが<言い直し②>
 16JN : 十月? [聞き返し②]
 17C : 十月くらいに日本に来ました。
 18JN : じゃ、まだ来て 11, 12, 1...
 19C : えー半年くらい

15C で/juugatsu/を/jugga/と発音している。これは長音にすべきところを促音で発音した単音の逸脱の例である。そして、C 自身が/juuga/と²言い直している<言い直し②>。JN は 15C の「去年」と「じゅが」「じゅうが」から「十月」であると判断し、調整を行っている [聞き返し②]。ただし、NS にとって 15C で行った「②発音をしなおすストラテジー」が、16JN の予測に有益だったかは明らかにはならなかった。

【例2】他者マーク他者調整・連続

- 130C : 値段は・・・中国でンハヤコのビール
 131JN : うん [聞き返し④]

- 132C : えーと
 133JN : 箱? [聞き返し②]
 134C : はこ<言い直し②>
 135JN : うん
 136C : はこ、12本、12本<言い直し①>
 137JN : うん、うん、うん

JNは130Cの「ンヒャコ」を受けて131JNでは「うん」と発言しているが、「何を言っていたのかよく分からなかったが、とりあえず相槌をうった」と述べており、131JNが「同意」ではなく「聞いている」機能だったことを示している。そして、133JNで「箱?」と聞き返している。130Cで/ha/ではなく/nhya/と単音とりズムを逸脱した発音をしてしまったため、JNは『二百個』かなと思ったが、『箱』かもしれないとも類推できたので聞いてみた」[聞き返し②]と述べている。JNは、134Cの/hako/を聞いて「箱」だと認識したため、この段階で調整は成功している。だから、135JNで「うん」と言うことで、「理解」を示している。だが、Cはこの時点で調整が成功したという確信が持てないため、136Cで「12本」と、「箱」を想像してもらった語彙に言い換えることにより、さらに調整を継続していると分析できる<言い直し①>。

【例3】他者マーク自己調整 + 他者調整・連続

- 18C : それはコーフ、コーフと言う
 19JH : えー。コーフ? [聞き返し①]
 20C : コーフ<言い直し②>
 21JH : コーフ [聞き返し①]
 22C : ちょうちょう、ちょうり<言い直し①>
 23JH : 調理師。コック? じゃない? [聞き返し②]
 24C : コック、コック
 25JH : コックさんね、あー

18Cで/kokku/ではなく/koofu/と述べている。促音にすべきところを長音にする逸脱と、/k/を/f/にする逸脱があったため、JHは、『コーフ』とが分からなかった」と述べている。そして、聞き返し戦略の「反復・説明要求(尾崎, 1993)」を用いて調整リクエストをしていると分析できる[聞き返し①]。しかし、Cは「18で言った発音が良くなかったのかもしれないとも思ったが、英語の発音なので日本人のJHには分からないのかとも思った」と答えており、20Cで再度「コーフ」と発音している<言い直し②>。

この段階でまだコミュニケーションが取れていないことに留意したCは、22Cで「ちょう、ちょう、ちょうり」と言い直しの戦略のうち①語彙の言い換えを試みている。そのことによって、23JHが「調理師=コック」であると推測し、相手から②予測して聞く戦略を引き出すことに成功したと考えられる。

【例4】他者マーク自己調整 + 他者調整・連続

- 57JN : なんか趣味とかはあるの？趣味
58C : 趣味、趣味は日本ではない
59JN : え、中・・・
60C : ジョウケイがない
61JN : え？何が？ [聞き返し③]
62C : ジョウケイ<言い直し②>、ジョウケイ？
63JN : ジョウケイ [聞き返し①]
64C : お金とか<言い直し③>
65JN : あー

66C : ジョウケンですか？
67JN : ん？趣味 [聞き返し①]
68C : 趣味の、この、漢字は
69JN : えっとー、趣味ってあの、なんていうのかな、じゃ、興味のあること、興味のあること
70C : 興味がある・興味がある・
71JN : うんと例えば・楽器を弾くとか、趣味
72C : 趣味、趣味はある。日本で、あまり趣味とか関係ない。
一生懸命勉強したり、働いたり、
73JN : そっか。そっちの方が忙しいってことだ

インタビューで、JNは「混乱してしまった」、Cは「とても困った」とコメントをしている。58Cの「日本では趣味がない」という言葉を受けて、59JNは「じゃあ、中国ではあるのか？」と質問をしようとしている。しかし、それを遮って60Cで「ジョウケイがない」と話したため、混乱を引き起こす。実は/jooke/ (条件) と言いたかったのだが、60Cで/ (jooke) n/ではなく/ (jooke) e/と逸脱した発音をしたことと、さらに、規範のアクセントが/jooke↓n/²であるにもかかわらず、/jooke/と発音してしまったことが、JNの理解を妨げる一因になったと考えられる。そこで、61JNで「何が？」と直接質問をして [聞き返し③]、調整行動をしているが、Cは「『ジョウケイ』の発音が悪くて通じなかった」と評価し、62Cで発音をしなおしている<言い直し②>。さらに「ジョウケイ？」と正しいかどうかの判断を求めているが、それでもJNには理解できず、63JNでは「ジョウケイ」と語彙を繰り返す [聞き返し①] ことで調整を試みている。64Cでは「ジョウケイ (条件)」の例として、「お金」をあげて調整を試みている<言い直し③>。その結果、65JNでは、「64Cで『条件』と発音していたのだと分かったから『その単語は理解できた』という意味で『あー』と言った」と述べており、この時点で発音に関する調整行動は成功している。だが、その後も混乱は続く。そもそも57JNの質問、「なんか趣味とかはあるの？」の答えに「条件」は適切ではな

いと評価したため、67JN で再び「趣味」と繰り返し [聞き返し①]、69JN では「趣味」を「興味のあること」と他の語彙に置き換えている。だが、C には「興味がある」が分からず、70C で語彙を繰り返し、聞き返している。つまり、JN は「C が「趣味」という語彙が分からないのだろう」と思っており、一方、C は『条件』さえ通じれば JN が理解できるだろう」と思っていたことが混乱の原因になったと推論される。60C から 65JN までの混乱は/jokee/という発音の逸脱が一因になっているが、それ以降は、発音の逸脱なしに/joken/と言ったとしても、語彙選択が日本語母語話者の規範からは逸脱しているため、混乱していた可能性があると考えられる。

以上、接触場面で NS が NNS の発音を「理解できない」と評価をした時、どのような調整行動に出るのか、また「理解されていない」と評価した NNS は、どのような調整行動に出るのかを調べた。

4. 母語話者規範からの逸脱と日本語母語話者の評価

4.1 逸脱と留意

次に、JN, JH が留意した発音の逸脱について述べる。これらは、JN, JH が「NS と違うけど、変だ、おかしいとは思わない」と述べている。つまり、留意はしているが、否定的な評価はしていないものについて考察をする。例文中では波線のひかれている箇所が該当する。

インタビューで得たコメントをもとに、逸脱の種類を「単音によるもの」と「プロソディーによるもの」に分類した。さらにプロソディーに関するものは①ピッチ、②リズム、③ポーズの3つの下位分類を設けた。

表3 逸脱と留意された発音

		JN	JH
単音	音の交替 (/ze/→/je/など)	9	6
プロソディー	①ピッチの高低 (アクセント、イントネ)	9	2
	②リズム (拍の挿入、欠落)	1	5
	③ポーズ	7	1
計		26	14

【例5】単音についての留意

164JH : じゃアルバイトで日本語をよく使う。もう 100% 日本語で

165C : ええ、じえじえ、じえんじえん、全部日本語で

166JH : はー。じゃいない、いないのね、中国の人はいない。

165C が/ze/を/je/と発音したことに JH は留意をしたと述べている。だが、「外国人だから、日本人と違う発音でも普通だと思った。『全然中国語は使わない』とか『全部日本語だけで話す』とか言いたいのだろうと分かった」と述べており、否定的には評価

していないと分析できる。

【例6】①ピッチについての留意

100C : 7月

10JN : うんうん

102C : 日本にいました

103JN : うんうん

104C : います。えー日本の生活はとても大変

105JN : はは、大変？

104C の発話に対して JN は「慣れていない印象だが、仕方がないと思う」というコメントをしている。この部分は、日本語母語話者なら「/ni ↑ honno/」と平板型で発音するところだが、「/ni ↑ ho ↓ nno/」と中高型で発音している。これはピッチが原因で留意されたものと考えられる。但し、コメントからは否定的に評価しているとは言えないと分析できる。

【例7】②リズムについての留意

37JH : じゃ、4組の勉強は全体としては、どのくらい分かる？

大体 60 パーセント、70 パーセント、80 パーセント

38C : 70 パセ

38C の発話について JH は「パセントに聞こえる」と、長音の欠落を指摘しているが、「パーセントだと分かった」と述べている。これは、日本語のリズムの習得が不十分なために起きた逸脱であると考えられる。

4.2 逸脱と否定的評価

次に、JN, JH が否定的に評価した発音の逸脱について調査した。その結果、JN と C の接触場面において1か所該当した。

【例8】③ポーズについての否定的評価

42C : 今、3組の、人も、同じ。多分、みんな、少しだけ、勉強した。

43JN : うん、うん。

42C の発話について JN は「ぶつぶつ切れ、流れるように話していなかった。待つのが少し疲れる」と述べている。内容理解には問題がなかったため、調整行動はない。だが、規範から逸脱したポーズの出現に対し、JN は否定的な評価をしていると言える。

5. 外国人学習者の発音についての許容

最後に、JN, JH に①Cさんと話しての感想、②外国人はどこまで日本語の発音を習

得するべきか、というインタビューをした。

①について、まず JN は、「テープを聞きなおすと気になる発音が出てくるが、本番中は話がブツブツ途切れることが一番聞きにくいと感じた」と述べている。但し、本調査中、C の故郷の話で盛り上がっていた場面については「発音の逸脱は全然気にならなかった」と述べている。筆者が聴取をして調べた限り、他の会話部分と同様、C の発音には音声面での様々な逸脱が観察されるのだが、JN は留意していなかったことが分かった。

JH は、「好印象。C の発音は 90 点」と答えた。これは、「通じているから問題がない」ことが理由だと述べていた。

②について、まず JN は「外国語なまりの日本語でも問題はない。特に留学生だったら、なおさら問題はない。地方出身者が東京方言と異なるアクセントで話すのと同じ」と答えた。そして、「日本の会社で日本語を使うとしても、例えば今の C くらいなら十分」と述べていた。

JH は、「目的（就職するか留学のみか等）によって習得度を変えればいい」と答えた。さらに、「発音は、日本人がある程度見逃すべき。意思疎通に支障がある時のみ、直すべき立場の人が指摘すればいい」と答えた。

今回、JN、JH と C の会話中、コミュニケーションに支障があり、そのために調整行動が観察されたのだが、JN、JH にとっては「コミュニケーションに支障があった」という意識はなかったようである。つまり、一言で「コミュニケーションに支障がある」といっても、話が盛り上がっているか、どの程度の支障なのか等の要因が関係していると推測できる。それは、母語話者同士の会話であってもコミュニケーションに支障があることは多々あり、それと同様に考えているのではないかと推論できる。

6. まとめ

まず、NS がコミュニケーションに支障なく内容を理解していると判断している場面は、NNS の発音の逸脱に留意、否定的評価をしても調整行動には出ないことが分かった。但し、これが計画的だったかどうかは明らかではない。また、実際にはコミュニケーションに支障があった場面についても、NS は「コミュニケーションに支障がない」と判断している箇所がある。さらに、話が盛り上がっている場面では逸脱を留意しにくいという意見もあり、これは、場面に由来する規範によって留意されなかったのではないかと推測できる。これらのことを考えると、NS も NNS も「コミュニケーションを続ける」ことを最も重要視しているのだと推論できる。

次に、発音の構成要素の中で、単音、カタカナ語の英語化、ピッチの高低については、留意をしているが「東京方言を話さないというだけのこと」と否定的な評価はしていなかった。これに対して、JN がポーズについてのみ否定的な評価をしたのは、日本語が地域により単音、アクセントに多くのバリエーションを持つことも関与しているのではないかと推測できる。つまり、単音やアクセントに逸脱があっても、日本にはそれを許容する土壌があるのではないかと考える。詳しいことは今後の研究課題としたい。

今回の調査を始める前は、調整行動が多く見られた音声の逸脱、あるいは否定的に評価されることが多い音声の逸脱から発音指導をすれば、学習者にとっては効率的なのではないかと考えていた。だが、音声のどのような逸脱が調整行動を引き起こすのか、ということではなく、コミュニケーションが継続可能かどうか、調整行動を引き起こすか否かの決め手になる、という結果になった。それでは、学習者がコミュニケーションを継続させるために、現時点で日本語教育の現場で教師が出来ることは何だろうか。その一つに、ストラテジーの指導があげられると考える。現在、教育現場でも「会話」の授業は、必ずと言っていいほど、どの教育機関でも行われている。だが、機能別、場面別、あるいは敬語などを扱うことが多く、ストラテジーに焦点をあてて指導を行っているという話はあまり耳にしないように思える。だが、相手とのコミュニケーションのための会話を継続することを目的とした指導を行うのであれば、言い直し、聞き返しのストラテジーを含め、多様なストラテジーを指導することも必要だと考える。具体的なカリキュラム、指導方法を考え、提示することを今後の課題の一つとする。

注

- 1 堀口(1988)では相づちの機能には1.聞いている、2.理解、3.同意、4.否定、5.感情表出があると述べている。
- 2 下向き矢印はアクセント核を示す。
- 3 本論文は、2010世界日本語教育大会(台湾, 国立政治大学外国語文學院)において口頭発表したものに、加筆修正を施したものである。

参考文献

- 和泉絵美・内元清貴・伊佐原均(2005). 「学習者コーパスからの表現バリエーションの抽出と言い換えストラテジー指導への利用」. 『自然言語処理』12(4),193-210.
- 小河原義朗(1993). 「外国人の日本語の発音に対する日本人の評価」. 『東北大学文学部日本語学科論集』3, 1-12.
- (1999). 「外国人日本語学習者の日本語発音不安」. 『東北大学言語科学論集』3, 13-24.
- 小熊利江(2002). 「学習者の自然発話に見られる日本語リズムの特徴」. 『言語文化と日本語教育』24, 1-12.
- 尾崎明人(1992). 「「聞き返し」のストラテジーと日本語教育」『日本語研究と日本語教育』. 名古屋: 名古屋大学出版.
- 尾崎明人(1993). 「接触場面の訂正ストラテジー—「聞き返し」の発話交換をめぐる—」『日本語教育』81, 19-30.
- 河野俊之(2004). 「発音は通じればいい、の中でのアクセントの許容度」. 『2004年度日本語教育学会春季大会予稿集』, 302-303.
- ネウストプニー, J.V.(1995a). 「日本語教育と言語管理」. 『阪大日本語研究』7, 57-82.
- (1995b). 『新しい日本語教育のために』. 東京: 大修館書店.
- ファン, S.K.(1998). 「接触場面と言語管理特別研究」. 『日本語総合シラバスの構築と

教材開発指針の作成』.会議要録.

堀口純子(1988). 「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」. 『日本語教育』
64, 13-26.

宮崎里司(2002). 「第二言語習得研究における意味交渉の課題」. 『早稲田日本語教育
研究』 1, 71-89.